

〈原著論文〉

隙間時間に実施可能な身体づくりの活動に関する一考察

- 運動あそびに関する研修を受けた保育者の気づきから -

A Study on the Activities of Physical Activities Implementable during Gap Time

- From the awareness of child caregivers who received training on exercise -

岸本 みさ子¹

要旨

本研究では、隙間時間に実践できる身体づくりを紹介した「動きのサンプル集」を使用し、その活動に関する運動あそびの実践と振返りの研修を実施することにより、保育者にどのような気づきが生じるのか、またその結果として保育の中に身体づくりの活動をどのように導入するのかを検討することを目的とした。その結果、保育者は子どもの動きの課題や運動あそびの実施方法など、様々な気づきを得ることが確認できた。また、その気づきが保育者の意識に変化を与え、隙間時間を利用して身体づくりを実践していくのではないかと推察された。「動きのサンプル集」を基にした研修の実施は、保育者の気づきを促すという点で有効であるという結論を得た。

キーワード：運動あそび，研修，保育者の気づき

Exercise, Training, Teacher's Awareness

I はじめに

文部省（現文部科学省）⁴⁾は6歳から59歳を対象とした体力・運動能力調査を1964年以降継続的に実施しており、子どもの体力・運動能力は1985年頃がピークであったと報告している。また、就学前の幼児を対象とした調査は定期的には実施されていないが、杉原ら¹⁵⁾は1985年頃までは幼児の体格および体力・運動能力は上昇傾向にあったが、1997年にかけて全ての項目で低下してきていると報告している。それらの現状を鑑み、文部科学省はスポーツ基本計画⁵⁾の中で子どもの体力水準を1985年の水準まで引き上げることを目指し様々な取り組みを展開しており、幼児についても、幼児期運動指針を策定し、体力・運動能力向上を目指している。

幼児期運動指針の取り組みとしては、「幼児は様々な遊びを中心に、毎日、合計60分以上、楽しく体を動かすことが大切」と示され、具体的なポイントとして、以下の3点が挙げられている。

①多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること（「体のバランスをとる動き」「体

を移動する動き」「用具などを操作する動き」)

②楽しく体を動かす時間を確保すること

③発達の特性に応じた遊びを提供すること

これらの取り組みを通じて保育の現場で子どもの身体づくりを積極的に実施することが求められている。奈良教育大学附属幼稚園^{7,8,9)}の取り組みでは、生涯にわたる健康な心や体をつくるために、幼児期に育みたい体力や運動能力、運動に対する意欲を日々の保育活動の中で高めていくことの重要性を述べている。杉原ら¹³⁾は、体育指導員を導入している園としていない園に通う子ども達の体力・運動能力について調査し、体育指導員を導入していない園の方が体力・運動能力は高かったと報告している。また、子どもが進んで運動あそびをするような援助を行っている園では、多くの子どもたちが登園後、自分たちで工夫し、様々な運動に主体的に取り組む姿が観察されており、杉原らは運動指導員の導入により、待ち時間が長く運動量が確保できないこと、運動パターンが限定されること、やらされている活動であるため運動に対する意欲が育たないといった点を課題として指摘している。

1 Misako KISHIMOTO 千里金蘭大学 生活科学部 児童教育学科

受理日：2018年9月7日

査読付

このことから、子ども達の体力・運動能力の向上には主体性が重要であり、個々が試行錯誤しながら、様々な経験を通じて自分の体を自分で動かす経験をすることが望ましいといえる。藤田ら¹⁾は、子ども達にとって最も身近な存在である保育者や大人が、日常の保育や運動あそびの展開方法を工夫し、さまざまな形で遊び環境を整備していくことによって、子どもの運動能力をさらに高めることも可能であるとしている。日々の保育の中で「待ち時間がなく」「子ども達が主体的に動くことができる」ようなあそびを通した身体づくりを、保育者が適切に働きかけることの必要性が窺える。保育者の身体づくりの活動に対する意識を高めることが重要である。

そこで本研究では、保育者が運動あそびの研修に参加することで身体づくりの活動についてどのような気づきが生じるのか、またその結果として保育の中に身体づくりのあそび(運動あそび)をどのように導入するのかを検討することを目的とする。

II 対象と方法

1. 研修概要

(1) 「動きのサンプル集」の事前配布

保育現場で活用できるような「動きのサンプル集」(以後サンプル集)¹⁰⁾を作成した。(表1)このサンプル集は、著者とS市の運動あそび指導員(以後S市職員)が今まで実践してきた活動を基に、隙間時間を活用して実施できそうな活動を検討し、まとめたものである。なお本論文では、保育時間の中で一斉に運動あそびをする時間以外に、一斉活動と一斉活動の間の時間といった、少しの空き時間を「隙間時間」と定義する。

このサンプル集をプログラム開始前の2017年5月にS市の全ての公立幼稚園・保育所事前配布した。その際、サンプル集で紹介されている活動を取り入れることにより、短い時間でも子どもたちの身体づくりの実践が可能であることを伝え、日々の保育で活用してほしい旨を伝えた。今後更に保育現場で活用しやすいサンプル集を作成するため、保育者が実践された内容の提出を依頼した。

研究協力園の保育者への依頼は以下の2点である。

① 「動きのサンプル集」で紹介されている活動の

中で実際に活用した動きにチェックをいれること

② 「動きのサンプル集」で紹介されている活動を、実際の保育の中でどのようにアレンジして取り入れたかを「オリジナル」の部分に書き込むこと

(2) 運動あそびプログラムの実施

6月以降に研究に同意してくれた幼稚園・保育所にS市職員が子ども達を対象とした運動あそびプログラムを実施した。S市職員は保育の資格・免許は保有せず、体育指導員の資格を持った指導者であるが、あそびを通して子どもたちの身体づくりを行うことの重要性を理解しており、体育的な活動を実施するのではなく、子ども達の主体性を引き出すような仕掛けを考えながら実施している。運動あそびプログラムは、サンプル集に掲載されている活動を中心に取り入れ、4・5歳児クラスを対象として、各回20分から30分で行った。保育者は、子ども達の活動状況を客観的に見ることができるよう、指導者としてではなく、子ども達と同じように活動に参加した。

(3) 運動あそびプログラム実施後の振り返り

運動あそびプログラム終了後、運動あそびを実施したS市職員が保育者対象の研修会を開催し、個々の事例について振り返りを行った。保育者を対象とした研修会は20分から30分程度実施し、実践した活動内容の意図や意義を伝え、運動あそびの時間や場所を確保して実施する活動だけではなく、時間や場所の確保ができない場合でも身体づくりに繋がる活動が可能であることを伝えた。

(4) 実施回数

各園には年間平均して2回から3回訪問し運動あそびの実践と研修を実施した。

2. 調査対象および方法

対象はS市立幼稚園6園、S市立保育所8園であった。研修回数は合計64回(運動あそびプログラムの実施および研修会)であった。

(1) 研修(運動プログラムの振り返り)

各回ごとに振り返りの時間を設け、保育者の発語から、運動あそびプログラムを実施することによる運動あそびの捉え方がどのように変化するのかを逐語録としてまとめた。

表1 動きのサンプル集 一部抜粋

動き	声かけ	オリジナル
背中ピンピンの三角座り		
	<p>いつでもどこでも背中ピンピンの三角座りに変身。</p> <p>おへそをキュッと引っ込めて、仕上げに首をニョキニョキしたら、カッコいい三角座りのできあがり。</p>	
ハイタッチ		
	<p>●●先生の手へ、みんなの大きな手のハンコを押し てみよう。</p> <p>パンって、いい音が鳴らせるかな？</p>	
お尻歩き		
	<p>(三角座りから) 両手を前に出してよっこいしょ。 (床に手を付いてもOK)</p> <p>お尻を付いたまま、進めるかな？</p>	
片足立ち		
	<p>グラグラしないように、1つの足をそーっと上げら れるかな？</p> <p>反対の足でもできるかな？</p>	

(2) 質問紙調査

1年間の研修を全て終了した後に、活動中の園児の様子および運動遊びプログラムを通じた保育者の学びについて質問紙により調査した。

(3) 「動きのサンプル集」の活用

配布したサンプル集の活用状況については、どのような時間帯に、どういったアプローチで導入したかなどについて自由記述にて記載されたものの提出を依頼し、分析に利用した。

3. 分析方法

(1) 研修（運動プログラムの振り返り）

各回ごとの振り返り時の保育者の発語をExcelシートにまとめ、KJ法³⁾を用いて内容を分類し分析した。

(2) 質問紙調査

質問紙調査およびサンプル集の活用については単純集計し、自由記述部分についてはKJ法を用いて分析した。

(3) 「動きのサンプル集」の活用

「動きのサンプル集」の活用状況や、オリジナル

な導入方法について単純集計した。

4. 倫理的配慮

S市の保育幼稚園課に研究依頼の許可を得、園長会において文書と口頭による説明を行った。調査への協力は任意であり、研究以外の目的には使用しないこと、調査協力の有無により利益不利益が生じることがないこと、個人が特定されることがないことなどを説明し、同意を得た園および保育者のみを対象とした。

III 結果と考察

1. プログラム実施後の振り返り

64回実施した研修の振り返りで発言された発語をまとめた。

保育者のことばをまとめると大きく6つのコードに分けられた(表2)。子どもの現状に関することは計231件あり、「姿勢保持が難しい」「三角座りができない」といった子どもの課題に関する記述であった。保育現場で実際に行っている取組みについては計110件あり、全てが事前に配布されているサンプル集の活用に関するものであった。運動

表2 運動あそびプログラム実施後の保育者の気づき

コード	具体例
子どもの現状に関すること	姿勢保持ができない 三角座りができない 体幹が弱い子が多い ハイハイが少ない など
保育現場で実際に行っている取組みについて	教えてもらったことをちょこっとタイムに取り入れた 給食の前に背中ピンをしている お尻歩きは空いている時間に実施した 生活の中で身体を動かすことを重点的にやってきた など
運動あそびに関すること	楽しそうに体を動かしていた よく話を聞いていた みんなが楽しめた時間を取ってもらえてよかった 普段しない動きを経験できた など
プログラムや保育者自身に対する気づき	1つエッセンスを加えると変わる 楽しみがあるとがんばれる 普段はしない三角座りもゲーム的に実施すればしていた 楽しいのが分かっているから、意欲的に取り組んでいるのがわかった など
子どもたちの変化に対する気づき	お尻歩きのスピードが上がった 体幹がしっかりしてきているのを感じた できた！が楽しいになっている 声に対する反応が速くなった など
保育者自身の学び	声かけの仕方は勉強になった サンプル集は辞書的な感じで使用している ワクワクする遊びを知ることができた 自分自身の保育の勉強になった など

あそびに関するものは計107件であり、「子ども達が楽しそうに体を動かしていた」「普段しない動きを経験することができた」といった、運動あそびに取り組むことでどのような効果があるのかという点に関する記述であり、プログラムや保育者自身に対する気づきは計83件で、「1つのエッセンスが加わることにより子どもたちの動きに変化が現れる」「普段できないこともゲーム的に実施することで子ども達が自然と取り組んでいた」といった、子どもたちが活動に集中して取り組むためにどのような工夫、また新たなアプローチ方法が必要なのかという点が挙げられていた。子どもたちの変化に対する気づきは計78件の記述があり、「お尻歩きのスピードが上がった」「以前より体幹がしっかりしてきている」「声に対する反応が速くなった」といった子どもたちの変化を捉える回答であった。保育者自身の学びは計52件の記述があり、「子どもに対する言葉がけに関する発見」や「活動自体が勉強になった」という活動内容や言葉がけに関するものであった。

保育者が子どもたちに交じり、指導する側ではなく、子ども達と同じように運動あそびプログラムに参加することで、子どもたちの動きの獲得状況や心身の変化に気づき、新たなアプローチ方法を検討する機会となったと考えられる。結果として、保育者は自分の日々の実践を客観視しやすくなり、子ども達の動きの獲得状況や心身の変化など新たな気づきや活動内容の見直しの機会を与えることができると考えた。

2. 運動あそびプログラムに関する調査結果

回答者は、幼稚園教諭6名、保育士8名の計14名であった。

(1) 日々の保育の中で気になる事項

日々の保育の中で気になる事項について選択回答を求めた結果、「動きのぎこちなさ」や「声の大きさを調整することができない」「集中して話を聞けない」といった課題が上位に挙がっていた。また「同じ姿勢を保持できない（姿勢保持）」という質問事項には全回答者がチェックしており、姿勢保持については特段問題意識が高いようであった。以上の結果から推察すると、自分の身体をコントロールする力の低下が課題とされていることが示唆された。

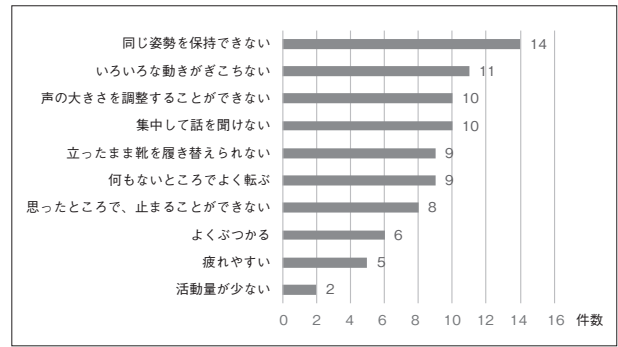


図1 日々の保育で気になる事項

(2) 運動あそびプログラムについての学び

運動あそびプログラムの実践を客観的に見ること、「隙間時間を活用」するアプローチ方法や、「動きを引き出す声かけ」の方法を知ることができたという回答が多数を占めていた。また、「運動あそびの引出しが増えた」「取り入れやすい内容だった」「生活の中での工夫が可能」というように、日々の保育の中で創意工夫により、実践可能であるという視点を持つことができたという結果であった。さらに、運動あそびプログラムの最大の魅力は、「子どもたちが身体を楽しく動かすことができる」という点であった。

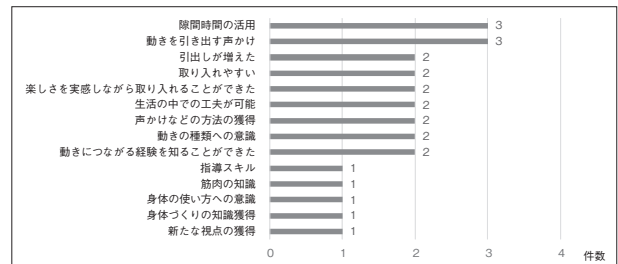


図2 運動あそびプログラムについての学び

3. 「動きのサンプル集」の活用状況

回答者は、幼稚園教諭13名、保育士21名の計34名であった。

一番多く活用されていたのは、「背中ピンピンの三角座り」で73.5%、ついで「ハイタッチ」「お尻歩き」が58.8%、「片足立ち」が55.9%であった。「背中ピンピンの三角座り」が高い割合で活用されていた理由として、姿勢の保持が課題だと感じている保育者が多いこと、また座ったままで実施できるため活用しやすいのではないかと推察した。

表3 動きのサンプル集の活用状況

動き	%	動き	%
背中ピンピンの三角座り	73.5	両手上げ→両手を引き上げる	17.6
ハイタッチ	58.8	クマ歩き(一本橋の上)	17.6
お尻歩き	58.8	ニョキ(ゆっくり)	17.6
片足立ち	55.9	起き上がり	14.7
フニャフニャピン	47.1	クモ(お尻上げ)	14.7
忍び足	47.1	腕の曲げ伸ばし	11.8
両手上げ	38.2	足鳴らし	11.8
三角座り→両手両足UP	38.2	両足ジャンプ(ターン)	11.8
手叩き	38.2	クマ↔クモ	8.8
足電話	38.2	クマ歩き(後ろ向き)	8.8
三角座り→両足UP	35.3	足首を持って歩く	8.8
ひっくり返り	32.4	四股踏み	8.8
バランス(座位)	29.4	両足ジャンプ(強弱)	8.8
ワニ	29.4	クモ(3点支持)	5.9
指合わせ	26.5	床叩き	2.9
クマ歩き(前向き)	23.5	しゃがんでコマ	2.9
立つ↔座る	23.5	片足クマ	0
トンネル覗き	20.6	膝に手を置いて歩く	0

また、どのようなときに実施(活用)したかという点については、「集まりの時」「遊びの導入」「リズム」「少しの待ち時間」という回答が多く、運動あそびの中で活用するというよりは、少しの時間、すなわち隙間時間での活用が多くみられた。サンプル集で紹介した活動や研修で実施した活動は、隙間時間で取り入れやすい内容であると考えられた。

サンプル集の各動きを、実際にどのように保育現場での活動に導入したのかを表4に示す。保育者は子ども達の動きを引き出すために、各動きをイメージしやすい言葉を選択し、子どもが楽しんで動くことができるように配慮していた。保育者が日々の保育の中で身体づくりに関して意識的に声をかけ、環境を整えていくことが重要であると考ええる。

IV まとめ

保育者が客観的に子どもを観察する機会を得ることで、子どもたちの動きや心身の変容を捉えることができるようになり、また保育者自身も様々な気づきを得る機会になることが明らかとなった。

森ら⁶⁾は園環境や保育活動が子どもの活動量や運動能力に影響を及ぼすという報告しており、保育者がどのような環境および内容を提供するかは身

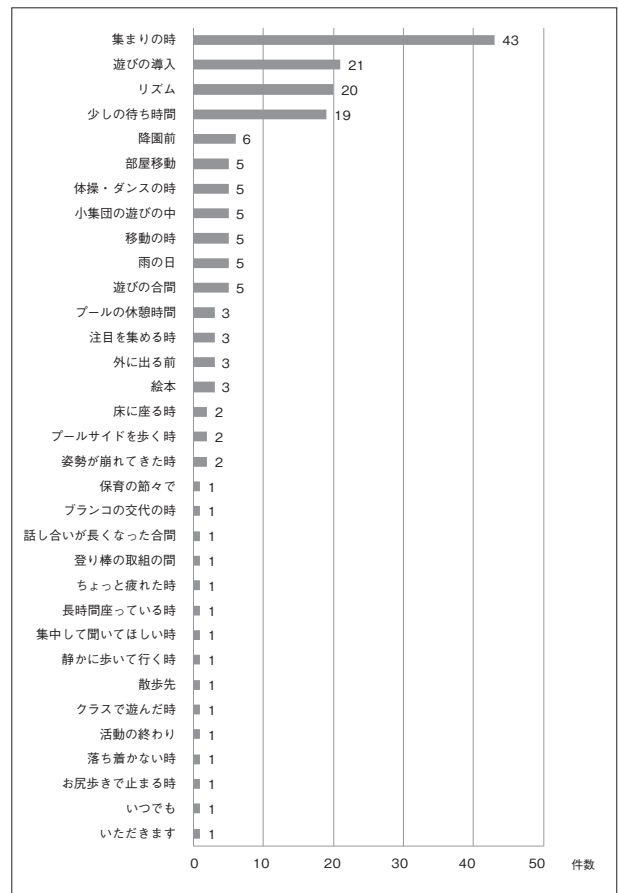


図3 動きのサンプル集で紹介されている活動をいつ実施したか

体づくりを促進する上で重要となる。しかし、現実的には園環境は様々であり、それぞれの環境に

隙間時間に実施可能な身体づくりの活動に関する一考察

表4 動きのサンプル集で紹介されている活動の実践例

動き	オリジナル				
背中ピンピンの三角座り	・背中ピーンとしてね。 ・足の所で手をがっちゃんして〜。	・おへそにギュッと力を入れて ・背中ピンピン、足ガッシャン。	・ピンピンスイッチ入りますよー。ピツ。	・シャッキーン座りして、お手でガッシャン鍵かけてくださーい。	・大きなおにぎりぎゅっ
フニャフニャピン	・ピンピンスイッチとふにゃふにゃスイッチ。				
両手上げ	・お兄さん指にピーンと力を入れたら、全部の指、まっすぐになるよ〜。	・天井に届くように手を上にあげてピーン。お空でお星さまがキラキラ〜。誰のお星さまがキラキラしてるかな。	・手を伸ばしてリラクセス	・やきいもグーチーパー	・どこまで手が挙がるかな。ぼんぎ〜い。上までぐぐぐぐ〜。
両手上げ→両手を引き上げる	・上にあるりんごを取ろうとジャンプして、上のものを取る。	・ごくろの実を取って食べる。	・少しお腹空いてきたね〜。大きいおにぎり作ろっか。何入れる。○○入れて、上の方に先生の好きな△△入れて、にぎにぎ、塩パッパツ、海苔巻いていただきまーす。パクツ。		
三角座り→両足UP	・片足上げて→反対→両足	・全員で輪になって座り、タオルを足で挟んで、隣に回していく。	・はい、足上げてー。1・2・3・4・5。休憩〜。	・足だけあげてみよう。足でせ〜のでパンツ。でも時々あれ。	
三角座り→両手両足UP	・手と足を上げて、○○先生とおなかカチカチ競争〜。	・誰が一番長くできるかな。	・手と足を交互にたたく	・円になって座り、全員が揃うまでの間、ストレッチ感覚で行う。	・手あげてー、足もあげてー、ゆーっくりそーつと足おろす。
バランス（座位）	・手は開いて、足は閉じる。反対と言いながらやる。				
片足立ち	・そのままケンケン、できるかな。お友達とぶつからないように、ケンケンで動いてみよう。	・かかしになってみよう。	・片足立ちから、体を倒して、トンボ。	・片足で何秒立てるかな、大会。	・手はシャキーンと横に、ふらふらししないで、できるかな。
ひっくり返り	・おせんべい焼くよ〜。おしょうゆ塗って、反対も焼くよ〜。	・よ〜く聞いてね。（小さい声で言う）上向くよ〜。せーの。ぐるっと。			
起き上がり	・自転車こぎから、手を使わずに、起き上がろう。	・あぐらをかいて、両手で足首をしっかり持って、だるまさんが転んだで、ゴロ〜ン。だるまさんが起きたで、足首を持ったまま、起き上がる。	・だるまさんが転んだで、足を上げて起き上がる。		
クマ⇔クモ	・お餅、焼きま〜す。ふくらんできたよー。そろそろお餅、ひっくり返そうかなー。せーの。どんどんふくらむよー。	・友達と会ったら、クマ：手と手でタッチ。クモ：足の裏でタッチ。			
トンネル覗き	・股のぞきジャンケン	・先生の顔がトンネルの中から見えたら、おーいって、手を振ってみてね。	・並んで、ボール送り		
手叩き	・足バージョン	・お顔の前でボンの歌で			
指合わせ	・糸まきの歌で	・お顔の前で、チョン。頭の上で、チョン。体の横で、チョン。			
床叩き	・大きな太鼓の歌で				
ハイタッチ	・先生とハイタッチの高さを調整しながらや子ども同士、指先タッチ。	・タンバリンに向かって、ハイタッチ。	・高さを変える	・タンバリンをたたく	・お弁当、全部食べたよ。
ワニ	・だるまさんが転んだ	5：手だけワニになってみよう。食べにくる動物がないか、みてみよう。空からもタカとかこないかな。			
クマ歩き（前向き）	・友達とあいさつしに行く。	・教師の足トンネルをクマで通る。			
クマ歩き（後ろ向き）	・教師の足トンネルをクマで通る。				
クマ歩き（一本橋の上）	・クマになって、お友達をまたいで行く。	・お友達が寝ているところを踏まないように、高バイで渡っていくよ。	・先生が寝転がって、子どもがクマになって、先生を踏まないように、渡って行く。	・床にビニールテープをつけて常にできるように。	・ワニが怖がるように、しっかり手でパンパンたいたいで渡ろう。橋から落ちたら、ワニにたべられる〜。
クモ（お尻上げ）	・クモで前に進む。手を軸に、足だけ左右に動く。				
足鳴らし	・こんなこと、こんなこと、できますか。				
忍び足	・忍者ごっこ	・忍者さんに、変身。ドロン。抜き足、さしあし、忍び足。			
立つ⇔座る	・子どもが教師役				
ニョキ（ゆっくり）	・お花を咲かせよう。小さい種をまきました。芽がでてきたよ。ニョキニョキ〜。花が咲きました。パツ。	・バナナおにごっこ	・たけのこ、見つかると食べられる。		
しゃがんでコマ	・誰にも見つからないように、小さくなって歩こう。				
足首を持って歩く	・小人歩きで				
四股踏み	・おすもうごっこ				
足電話	・もしもし、今からホールへ行きます。	・今から○○しませんか。	・円になって座り、電話をかける。		
お尻歩き	・おにごっこ	・リレー	・ジャンケン列	・開戦ドン	・おにごっこ

見合った活動内容を提供することが求められる。そのためには保育者が運動あそびの実施方法を様々な観点から考察できるようになることで、それぞれの環境に見合った活動が実施できるようになることが重要であり、今回実施した研修のような取り組みが一つの糸口となるのではないかと考えられた。身体は日々の積み重ねによって育つため、日々の生活においても継続可能な身体活動を取り入れていくことは大きな意味を持つと考える。

今回の調査で、S市職員が運動あそびを行う場面に保育者が客観的な視点を持って参加することで、子どもの動きの課題や運動あそびの実施方法など、様々な気づきを得ることができた。その気づきが保育者の運動あそびに対する意識に変化を与え、自身の保育活動を変化させていくのではないかと考える。保育者が子どもたちを客観的に見ることができる「運動あそびプログラム」および「振り返り」を行う研修は、保育者の気づきを促すという点で有効であった。

<文献>

- 1) 藤田公和・石橋満 (2001). 幼児の運動能力の発達におよぼす「意図的な働きかけ」の影響 体育の科学、51(12)、991-995.
- 2) 岩崎洋子編 (2018). 保育と幼児期の運動あそび 第2版 萌文書林.
- 3) 川喜多二郎 (2008). 続・発想法 KJ法の展開と応用 中公新書.
- 4) 文部科学省 (2018). 平成29年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果について.
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/kodomo/zencyo/1401184.htm.
- 5) 文部科学省 (2012). スポーツ基本計画.
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/plan/index.htm
- 6) 森司朗・杉原隆・吉田伊津美・近藤充夫 (2004). 園環境が幼児の運動能力発達に与える影響 体育の科学、54(4)、329-336.
- 7) 奈良教育大学附属幼稚園 (2013). 「幼児期に必要なからだ力について考える」～体づくり・動きづくり・気持ちづくりの観点から～, 奈良教育大学附属幼稚園研究紀要
- 8) 奈良教育大学附属幼稚園 (2015). 「幼児期に必要な『からだ力』を育む」～「からだ力・広がる可能性」～, 奈良教育大学附属幼稚園研究紀要
- 9) 奈良教育大学附属幼稚園 (2016). 「幼児期に必要な『からだ力』を育む」平成27年度文部科学省「幼児期の運動に関する指導参考資料作成事業」報告書, 奈良教育大学附属幼稚園研究紀要
- 10) 吹田市・千里金蘭大学 (2017). ココ(心)・カラ(体)はじめよう!動きのサンプル集.千里金蘭大学.
- 11) 杉原隆・河邊貴子 (2014). 幼児期における運動発達と運動遊びの指導—遊びの中で子どもは育つ— ミネルヴァ書房.
- 12) 杉原隆・吉田伊津美・森司朗・中本浩輝・筒井清次郎・鈴木康弘・近藤充夫 (2011). 幼児の運動能力と基礎的運動パターンとの関係 体育の科学、61(6)、455-461.
- 13) 杉原隆・吉田伊津美・森司朗・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩輝・近藤充夫 (2010). 幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係 体育の科学、60(5)、341-347.
- 14) 杉原隆・近藤充夫・吉田伊津美・森司朗 (2007). 1960年代から2000年代に至る幼児の運動能力発達の時代変化 体育の科学、57(1)、69-73.
- 15) 杉原隆・森司朗・吉田伊津美・近藤充夫 (2004). 2002年の全国調査からみた幼児の運動能力 体育の科学、54(2)、161-170.
- 16) 杉原隆・近藤充夫・森司朗・吉田伊津美 (1999). 幼児の運動能力判定基準と、園・家庭環境および遊びと運動発達の関係 体育の科学、49(5)、427-434.
- 17) 吉田伊津美・森司朗・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩輝 (2015). 保育者によって観察された基礎的運動パターンと幼児の運動能力との関係 発育発達研究、68、1-9.
- 18) 吉田伊津美・杉原隆・森司朗・近藤充夫 (2004). 家庭環境が幼児の運動能力発達に与える影響 体育の科学、54(3)、243-24.